

第5回「こころにジ〜ンとくる！

いのちのエンジニアのはなし」受賞作品

最優秀賞 「はじめての手紙」

技士部門 丸宮千冬様

「病院の方々のおかげで、自宅に戻れて本望、と主人は旅立っていくことができました。」
ある患者さまのご家族からいただいたお手紙を紹介させていただきます。

肺炎の増悪で緊急入院され余命宣告をされた患者さんは、ネーザルハイフローが手放せない状態でした。

ストレスや不安から患者さんはわがままな態度をとりスタッフは困惑する事もありましたが、最期は自宅で迎えたいという患者さんと献身的な奥さんの希望を叶えるための在宅プロジェクトが立ち上がりました。

現時点でネーザルハイフローの在宅向け装着はありません。

そのため在宅用人工呼吸器を擬似的に調整する必要がある事と、私自身人工呼吸器の在宅支援経験が少ないため、先輩やメーカーさんに協力してもらいながら機器の調整や奥さんへの指導を行いました。

退院に向けて他職種を交えたカンファレンスを何度も重ねる内に、患者さんを中心にした結束力が強まっていくことを実感しました。

そしていよいよ退院当日。

病院スタッフが患者さん宅と一緒に同行する事となり、臨床工学技士としては私が行くことになりました。

はじめての経験であり不備がないよう何度も確認しても不安でたまりませんでした。ご自宅に戻られた時の嬉しそうな表情は今でも忘れられません。

数ヶ月後に息を引き取られましたが、奥さんからのお手紙を読んで、悩みながら向き合ってきた数ヶ月は支援になっていたのだとホッとしたと同時に、とても嬉しく思いました。急性期病院に籍を置く私にとって長期間患者さんと密に関わる機会は少ないですが、患者さんにご家族の最期に寄り添えたのかもしれない。

この経験の後にも人工呼吸器の在宅支援に携わる機会がありました。

まだ模索段階ではありますが、患者さんにご家族に寄り添っていけるよう努力していきます。

第5回「こころにジ〜ンとくる！

いのちのエンジニアのはなし」受賞作品

理事長特別賞 「涙の賞状」

一般部門 増子奏多様

僕には大切な宝物があります。

幼いころに父を亡くし、母は女手一つで僕を育ててくれました。

毎日遅くまで働き、休日には一緒に遊んでくれて、忙しく疲れている筈なのに

いつも明るくて、そんな優しい母が大好きでした。

母は1型糖尿病を患っており、僕が10歳のころに母は腎不全になり、透析を受けることになりました。

週三回透析に通いながら働き、とても大変だったと思います。

それでも母は明るくて

「臨床工学技士さんが気さくに話してくれて、とても楽しい。週三回も会うんだから家族みたいだよ」と話してくれました。

学校帰りに透析室に寄り、母と一緒に帰宅することも良くあったのですが、母の話通り

臨床工学技士さんは気さくな方が多く、僕も良く可愛がってもらっていました。

ある日、学校から配られた運動会のお知らせを母に見せました。

親子リレーが行われるとのことで母は「一緒に出て一等になろう」と笑顔で約束をしてくれました。

しかし運動会の一週間前に母は感染症を起こし入院をしてしまいました。

運動会当日、周りの友達には家族がいて、独りぼっちな僕は下ばかり見ていました。

すると突然僕の名前を呼ぶ声がきこえてきました。

臨床工学技士の方々がスタッフを連れて応援に来てくれたのです。

僕は驚きと嬉しさで涙が溢れてきました。

親子リレーの時間。臨床工学技士の方が「いくぞ」と僕の腕を引っ張りました。

諦めていた親子リレー。事前に学校に許可を取ってくれていたそうです。

本当に家族みたいだなと感動し泣きながら走ったのを覚えています。結果は2等でした。

後日、母が退院し臨床工学技士の方々が運動会を見る事が出来なかった母のために透析室で運動会の表彰式を開いてくれました。

手作りの賞状をもらい、母と二人で泣いてしまいました。

賞状の文字が涙で滲んでしまいましたが、僕の一番の宝物です。

第5回「こころにジ〜ンとくる！

いのちのエンジニアのはなし」受賞作品

優秀賞 「私が目指す臨床工学技士」

学生部門 出牛雅也様

はじめに私が臨床工学技士を目指そうと思ったのは、ダヴィンチという手術支援ロボットを本でみかけたことがきっかけでした。私はもともと機械を触ったりすることが好きだったことからこのロボットに興味を持ち、医療機器について調べていくとこれらに携わる臨床工学技士というものを知りました。

臨床工学技士になろうと大学に入り1年目の病院見学で、自分の臨床工学技士という仕事について考えを変えさせられるものでした。私はその時、臨床工学技士は院内の機器の管理・操作などをしているという考えでした。病院見学では、実際の臨床工学技士の方が実際に働いているところ、院内にある医療機器を見て回るもので、すべての見学が終わった後、案内をしてくれた先生が臨床工学技士として重要なことは何か、と質問を投げかけてくれました。私や友達は医療機器の知識、責任感などと答え、どれももちろん大事と答えてくれました。しかし、先生はそれらと同じくらい重要なことはコミュニケーション能力、実際の現場では他の医療スタッフと手術や機器操作を行う際の連携や情報の共有、また特に透析業務では、患者さんとの関わりが長く、信頼関係を気づくことが必要。患者さんは医療機器のことをよく知らず、そんな機器を使用しているため、不安は必ずあるはずでそんな不安を少しでも私たちが減らしていくためにもコミュニケーション能力も大切だと教えてくれました。これを聞き、医療機器の知識が特に必要で機器の管理や操作のみをしていればいいという考えだけではなく、患者さんとの関係を築くことも臨床工学技士には重要だと深く感じました。

この病院見学での先生との出会いで、自分ができることはただ機器を操作するだけではなく、患者さんの精神的な面でも手助けをすることができると気づかされたことで、より患者さんと近い臨床工学技士を目指そうと決めたことは忘れられません。